Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-02

ピーター・L・バーガーの〈アメリカ〉 : 亡命者としての評価と葛藤

池田, 直樹

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 63:1*-38*

(Issue Date)
2025-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100494073

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494073

ピーター・L・バーガーの〈アメリカ〉
――亡命者としての評価と葛藤――

池 田 直 樹

1. はじめに

本稿の目的は 20 世紀のアメリカ社会学を代表する人物の 1 人として知られるピーター・L・バーガーのアメリカ論、特に 1970 年前後のものを取り上げ、彼がアメリカの社会や文化をいかなるものとして評価したのかを明らかにすることである。このことが問題になるのは、それがこの時期以降の彼の思索に深く関わると共に、同時代のアメリカにおける政治的、イデオロギー的対立の一幕を理解するための鍵となる論点だからである。換言すれば、これは 1970 年代以降の彼の活動とそれを取り巻いていたであろう種々の文脈を理解する上で枢要な問いなのである。

周知のようにバーガーは 1960 年代に発表した諸著作によって世界的な知名度を得ることになった。「現象学的社会学」や「構成主義」などとラベリングされるこの時期の彼の社会学的な業績についてはすでに多くの研究が積み重ねられており、その意義も広く知られている。しかしその一方で、1970 年代以降、バーガーはその関心の焦点を社会学理論の構築から現実のアメリカ社会の諸問題へと移し、保守派の有力な論客として種々の言論活動・社会活動を展開していくことになる。彼のアメリカ論はこうした活動の中心的な部分を形成するものであるが、その意義の検討という作業は日本においてもアメリカにおいてもまだその緒に就いたばかりの段階にある（池田、2023; Imber, 2023）。つまりこの方面においては、バーガー論としてまだ解明されていない部分が残されているのである。これに関してとりわけ重要なのは、バーガーが思い描いていたアメリカ社会像の内実、特にそこに具現される価値が彼自身にとっていかなる意義を持っていたのかということである。これは、なぜ彼がある時期以降にアメリカの保守という道を選んだのかを明らかにする上で、そして彼なりの保守主義

©Naoki Ikeda 2025

の意味やそれと彼のアメリカ論との関連を知る上で大きな手掛かりとなる論点である[1]。それゆえ本稿ではそのアメリカ論の展開に至る契機を彼の思想的発展の文脈に改めて置き入れることによって、その答えを探っていきたい。

それでは、バーガーとアメリカとの関係はいかなるものであったのだろうか。無論これについては本論でその詳細を解明していくことになるが、ここでその概略を示しておけば次のようになる。バーガーは当初、特に渡米前はアメリカという異国の地に対する熱烈な憧憬を抱いていたが、渡米後その社会を実地に味わう中で次第にその熱は冷めていき、アメリカへのかつての信頼も揺らいでいくことになる。彼のアメリカ観に暗い影を落としたのは、直接的には人種差別やヴェトナム戦争の現実だった。しかし同時に、それらは彼をして今一度アメリカの意義を再考させる事態でもあった。その結果としてバーガーはアメリカの理念と力強さを改めて肯定するようになるのだが、重要なのは、こうしたアメリカ観の変化が彼の信仰とも密接に絡まり合っていたということである。もちろん彼のアメリカ観はそれを地上における神の国と見なすような単純なものではなかったし、彼の信仰もアメリカの偉大さを支えとするようなものではなかった。けれどもバーガーにおいて、信仰の動揺とアメリカ社会への幻滅、そして信仰の再確立とアメリカの意義の再肯定はいわばパラレルな関係にあるのである。一見すると不可解な、とはいえ深いところで呼応し合った両者のこの複雑な関係は、おそらく信仰というものが生とそれを取り巻く世界の意味の源泉たることに由来するのだろう。いずれにせよ、ここで取り上げるのはバーガーとアメリカの上記のような関係である。したがって以下では、特にバーガーがアメリカの社会や文化、ならびにそこに具現された価値に対して抱いていた理想を指す場合には〈アメリカ〉と表記することとしたい。本稿が明らかにしようとするのは、まさにこうした〈アメリカ〉と実際のアメリカとの関係をめぐる彼の思索である。

こうした消息を浮き彫りにすべく、本稿はバーガーの個人史的な側面、すなわち彼がユダヤ系の出自を持ち、ヨーロッパを追われた亡命者であったという事実に着目する。僅かの例外（Heilman, 2023）を除けば、従来のバーガー論でこの事実が主題的に取り上げられることはほぼなかった[2]。本稿の目論見は、

この亡命者としてのバーガーという視角から上に述べたような彼と〈アメリカ〉、ならびにそれらとアメリカの現実との関係を浮かび上がらせることである。鍵となるのは、現実のアメリカに対する彼の深いアンビヴァレンスとある種のバイアスである。本稿はこれらの影響の論証を通してアメリカにおける社会学者と保守主義の関係の一端に迫ることになるが、末尾で示唆するように、それはさらに 20 世紀の亡命知識人の研究に対するささやかな貢献にもなるだろう。

では、いかなる手法でこの問題にアプローチすればよいだろうか。1970 年代以降の彼の活動を理解するには、それ以前の著作にその萌芽を探すというのが常套手段だろう。だが実は、ここには検討すべきテクストの選択という難しい問題が伏在している。というのも 1961 年の『聖会の騒音』を除けば、1960 年代のバーガーの著作にアメリカ社会を主題的に取り上げたものはあまりないからである。しかもこの作品と 1970 年代以降の論考は、その間に介在するアメリカ社会の様々の騒乱のために、両者を結ぶ糸が極めて見えにくいという関係にある。その上後述するように、『聖会の騒音』の執筆以降はバーガー自身もそこで依拠していた立場を大きく変更しているのである。だとすれば 1970 年代以降のアメリカ論へとつながる彼の思索の萌芽をどこに探ればよいのだろうか。

本稿はこの謎を解くための鍵を彼の小説に求める。バーガーは 1960 年代半ばに 2 冊の小説を書いており、うち 1 冊は 1965 年に筆名を用いて、もう 1 冊は彼の本名で執筆から十年後の 1975 年に刊行された（Bastian, 1965; Berger, 1975）。商業的にはほとんど成功しなかったこの 2 冊の小説は、これまでは論究されることすら稀であった[3]。だがそこには抽象的な社会学理論を主題とする著作からは見えてきづらい彼自身のアメリカ像が描き出されており、まさにそこで扱われていた問題がその後のアメリカ論につながっていくことになるのである。

このため以下の本論は次の手順で進められる。まずは彼の自伝に依拠して、渡米前後のバーガーの人生と小説の執筆に至る経緯を見ていく（第 2 節）。次に 1960 年代の彼のアメリカ観を、2 冊の小説を読み解きつつ確認する（第 3 節、第 4 節）。そして最後にそれらを踏まえて 1970 年に発表された彼のアメリカ論を検討する（第 5 節）。

2. 亡命者としての経験

2.1 渡米前

バーガーにはドイツ語版（Berger, 2008）と英語版（Berger, 2011）の 2 冊の自伝的著作があり、前者は渡米に至るまでの幼少期から思春期頃までの経験を、後者は渡米後の社会学者としての生涯を綴っている。ドイツ語版の方は故郷を追われた暗澹たる時代の記録ではあるものの、いずれの作品も全体としての雰囲気はバーガーの生来のユーモラスな気質も手伝って温かく、微笑ましい調子で一貫している。以下ではまずこのドイツ語版に依拠しながら、渡米前の彼の人生における 3 つの重要な局面を紹介しよう。すなわち故郷喪失者としての経験、キリスト教徒としての形成、そして〈アメリカ〉への希望である。

バーガーは 1929 年にウィーンでユダヤ人の両親の下に生を受けた。父母共にユダヤ系の出自を持っていたが、父方では父ゲオルクの幼少期からすでにユダヤ教は家庭内で形骸化しており、母方でも母イェルカの祖父母の頃から長らく同化ユダヤ人の家庭となっていたという（Berger, 2008, p. 43, pp. 89-90）。しかしいわゆるニュルンベルク法に従えばバーガー家は紛れもないユダヤ人の家族であり、オーストリア併合を機に一家の亡命は必至となった。無論出国のためのビザの取得も容易ではなく、亡命への道のりは困難を極めた。だが紆余曲折の果てに辛くもヨーロッパからの脱出に成功した彼らは、第 2 次大戦の終戦までの時期をパレスチナで過ごすことになる（Berger, 2008, pp. 101-3）。

当地での社会的な地位はアウトサイダーとしてのそれだったと後にバーガーは述懐している（Berger, 2008, pp. 141-2）。というのもバーガー家はシオニストとしてパレスチナに来た訳ではなかったが、他方でその他のユダヤ人難民のグループにも容易に溶け込むことができなかったからである。それは、彼らがまだウィーンにいた頃、ビザを取得するための一策としてアングリカン・チャーチから洗礼を受けていたという事情による。バーガーによれば 1938 年夏のウィーンでは、キリスト教に改宗をすれば南米諸国へのビザが比較的容易に発行されるらしいとの噂が流れており、英国大使館に勤める 1 人のアングリカン・チャーチの牧師が希望者に洗礼を施していた。バーガー家は藁にもすがる思いでこの牧師から洗礼を受けて改宗し、その証明書まで手に入れていたのである。

もっとも、これはあくまでも生きてヨーロッパを離れるための方策の 1 つであり、自伝ではバーガーの父はカトリックとアングリカン・チャーチの違いを説明することができなかったと記されている（Berger, 2008, pp. 113-5）。ともあれバーガー家は一応正式に改宗したキリスト教徒であり、このために彼らはユダヤ人を自認する難民たちの一員になることもできなかったのである。実際パレスチナではバーガーたちがキリスト教に改宗していたことが徐々に知れ渡るようになると、彼らとの付き合いを断ってしまうユダヤ人もいたという（Berger, 2008, p. 122）。

こうしてウィーンを脱出して以降のバーガーは、文字通り故郷を追われたという意味でも、新たな地で故郷を見つけることができなかったという意味でも、二重の意味で永続的な故郷喪失者とならざるを得なかった。ある社会の中に空間的に包摂されながらも決してそれと完全に同一化することのないこのアウトサイダーとしての経験が、その後の宗教的形成と相まって、彼の社会学に個人と社会の相剋という重要なモティーフを与えることになったのではないかと推察される。

それでは、彼の宗教的形成はどのようなものだったのだろうか。上に述べたようにウィーンで洗礼を受けていたとはいえ、パレスチナ到着直後の頃はまだバーガーにとってキリスト教は重要なものではなかった（Berger, 2008, p. 110）。ところが当地で知り合ったブロックという人物――彼もまたユダヤ教からキリスト教へと改宗していた――からカルメル山にあるスイス系のミッション・スクールを紹介されたバーガーはそこに通うようになる。そこではルター派の宗教的慣行が実践されており、自伝では、バーガーはこの学校で初めて決定的な宗教的体験を果たしたと記されている。かくして彼は自身の体験とその学校の教師たちに導かれながら、ルター派の宗教的世界に誘われていったのである（Berger, 2008, pp. 134-5）。

またバーガーはこのミッション・スクールに通い始めてから 2 年目の時期にフリッツ・ノイマンという宣教師に出会う[4]。ノイマンもまたウィーン出身で、妻と共にキリスト教に改宗した元ユダヤ人だった。それに加え、彼はウィーン大学で哲学の博士号を取得した後、独学で聖書学や神学の知識を身につけた人

物だった。バーガーにとって重要だったのは、ノイマンがある時期から霊的な面での教師の役目を務めてくれたことである。彼は当時 10 代だったバーガーの信仰の悩みに耳を貸し、哲学の基本的な文献と入門的な神学書を読むよう勧め、さらには読むべき本を貸し与えもした。こうしてアメリカに渡る前の最後の 2 年間に、バーガーは 2 週間ごとにノイマンを訪ね、その間に読んだ本について議論するという時間を積み重ねていった。ノイマンは哲学の分野ではプラトン、カント、キルケゴールを読ませ、神学ではアウグスティヌス、ルター、バルトなどの作品を読ませた。それらがバーガーの精神的形成に大いに寄与することになったのだという（Berger, 2008, pp. 164-7）。

これらに加えてバーガーの宗教的形成に大きな影響を及ぼしたのが、ハイファのとある教会に残されたベルク牧師の蔵書だった。もともとその教会には第 2 次大戦前にドイツの告白教会に関わっていたベルクという牧師がいたが、開戦直前に彼はドイツに帰国し、その膨大な神学関係の蔵書がそのまま残されていた。バーガーは彼の後任の牧師からその蔵書を自由に読む許可を得ていたという（Berger, 2008, pp. 161-2）。バーガーが借りたのはすべてルター派神学かドイツ教会闘争に関係する文献だった。かくしてこれらの文献を通じて、彼は告白教会の影響を受けつつ、ルター派としての信仰を固めていくことになったのである（Berger, 2008, pp. 186-9）。周知のように、バーガーはこのルター派の信仰を生涯抱き続けた。

以上がバーガーの宗教的形成の概略であるが、このようにしてキリスト教徒としての形成を経る中で彼は徐々にアメリカという異国の地に対する熱烈な希望を抱くようになっていった。1945 年の夏、1924 年移民法の国別割当制のためにパレスチナで渡米の順番待ちをしていたバーガー家についに入国の許可が下りる。渡航手段を模索して奔走していたこの時期に、またしてもバーガーは宗教的な経験をする。それは、自らがキリスト教の教会に奉仕すべく神に呼ばれているという感覚に満たされる経験だった（Berger, 2008, p. 202）。まさにこれは神の召命として理解された経験であり、また渡米を控えていたバーガーにとって、それはアメリカの地での奉仕を意味していた。かくして彼はユダヤ人ではなくキリスト教徒として、イスラエルではなくアメリカこそが自らの約

束の地だと考えるようになったのだという（Berger, 2008, p. 201）。もっとも英語版の自伝によれば、牧師になるというこの熱意はアメリカに到着して間もなく失われてしまい（Berger, 2011, p. 10）、その結果、周知のように彼は社会学者としての人生を歩むことになる。残念ながら、この牧師の道を断念するに至る間の消息はいずれの自伝においても詳しくは語られていない。

しかしだからといってアメリカの社会や文化が体現する希望への熱情、すなわち〈アメリカ〉に対する彼の憧憬そのものが失われてしまった訳ではなかった。ドイツ語版の自伝の中心的なメッセージの 1 つは、「私は、誰にも私のアイデンティティを私に押しつけさせたりはしないと決意した――ナチスにも、ユダヤ人ナショナリストにも、誰にも」（Berger, 2008, p. 14）というものだった。それは他律的なカテゴリー化を拒否し、自らの生き方を自分自身で選ぶ意志と自由、およびそれに伴う責任を何よりも重視する立場の宣言である。これは自ら望んだ訳ではない出自によって人生の一時期を翻弄された人間の率直な願いであっただろう。バーガーは、〈アメリカ〉はこのような生き方を完全に許容するはずだという、燃えるような期待を抱いていたのである。

> この国では私が何をしたいと望もうとそれをすることができ、何でありたいと望もうとそれであることができるということを私は知った。私はここではすべてが可能だと知った。アメリカでの私の人生は完全にはこの期待に沿わなかった。だがそれは当初の期待にかなり近いところまで行ったのである。（Berger, 2008, p. 218）

これは若き日のバーガーが〈アメリカ〉に対して抱いていた期待の端的な表明である。無論それは過度に理想化されたアメリカ社会のイメージだったかもしれない。後述するように、実際に彼自身も後にその現実を知ることになる。けれどもそれは、確かに彼のアメリカ像の根底にある原風景でもあった。というのも彼は後年、個人が自ら選び取った価値に基づいて生を営むこと――良心の自由の理念――を断固支持するという立場から、合衆国憲法修正第 1 条を中核的な理念とする社会構想にたどり着いたからである。「アメリカにおけるリベラ

ルな社会的、政治的伝統の保守」（池田、2023、p. 247）とも表現しうるこうしたバーガーの最晩年の到達点には、〈アメリカ〉へのかつての憧憬が確かに木霊していたはずである。そしてそこへとつながっていく 1970 年代以降のアメリカ論もまた、彼のこうしたアメリカ像に根本的に規定されていたのである。

それでは、念願のアメリカへの入国を果たしたバーガーの目に当地の現実はどのように映っていたのだろうか。冒頭に述べたようにそれは彼の 2 冊の小説の中に描き出されているが、そこに至るまでにもまた紆余曲折があった。次項では小説の執筆に至るまでのそうした経緯を確認しておこう。

2.2 渡米後

小説の執筆に至るバーガーの内的動機、すなわちそこに至るまでの彼の思索の発展は最初期のいくつかの著作からたどることができる。具体的には、それは彼が新正統主義神学と呼ぶカール・バルトやディートリヒ・ボンヘッファーの思想からの漸次的乖離の過程に示されており[5]、作品史で言えば『不安定な情景』『聖会の騒音』から『社会学への招待』へと続く展開がそれにあたる（以下それぞれ『情景』『騒音』『招待』と略記）。社会を人間の生み出した「劇のような虚構」（Berger, 1961b, p. 48）と見なし、そこで自明視されている現実からの脱出の道筋を示唆するという点でこの 3 作は共通している。そこには社会による個人の全面的包摂に対する倫理的な批判が提示されているが、これは現実のアメリカ社会に対するバーガーの批判的な意識の芽生えとも連動していた。

バーガーはこの批判を「自己欺瞞」というジャン・ポール・サルトルの言葉を援用しながら展開する。バーガーの言う自己欺瞞は、個人が社会の用意する種々の役割に完全に同一化し、自身の行動を「そうする他はない」という理由で正当化するようになることである。これは社会が様々の役割を通じて個人に課す要求、すなわち役割期待への全面的な服従である。しかしバーガーによれば、人間はその社会の要求に対して「否」と言うことができるし、実際にしばしばそのように告げてきた。バーガーはサルトルに倣って、そこにこそ人間の自由があるのだという。それゆえ「他に術はない」という言明は自己欺瞞なのである。さらに自己欺瞞は自身の行動が招きうる帰結から目を背けさせ、社会へと

その責任を転嫁させる。この場合、それは人間の自由の否認であるだけでなく、個人に自らの行動の責任から逃れるための言い訳を与えることにもなる。バーガーはこのような事態を厳しく批判するのである（Berger, 1961b, pp. 85-95, 1963, pp. 142-5）[6]。

この議論には先に見た亡命者としてのバーガーの経験が、社会の論理と個人の自由の間には常に齟齬が生まれうるという洞察として映し出されている。その不一致を示唆する際に『情景』と『騒音』は新正統主義神学に依拠する。宗教とキリスト教を峻別し、後者の絶対的超越性を前提にして、社会が人間の生み出した「劇のような虚構」であること、宗教がそれを補強するよう機能することを暴露するというのが『情景』の論旨である。「真の神の崇拝には常に偶像の破壊が伴う」（Berger, 1961a, p. 14）と述べられる『騒音』では、このような立場から 1950 年代の宗教復興に湧くアメリカ社会が批判的に描き出されている。

だがそれに加えて宗教の負の側面に対するこのように批判的な態度には、アメリカで彼が実地に経験したことも反映されていたのではないかと思われる。すなわち南部の経験である。それは 1956 年からの 2 年間にわたるノースカロライナ女子大学での勤務に伴うものだった。当地の人種差別的状況は抑圧的なものに感じられたとバーガーは後に述懐しているが（Berger, 2011, p. 62）、彼にとってとりわけ衝撃的だったのは、自ら参加したキング牧師の集会とクー・クラックス・クランの集会の両方で「丘に立てる荒削りの」という聖歌が歌われていたことだった。彼は次のように述べる。

> その教訓は私にとって劇的なものだった。それは、同じ宗教的伝統のシンボルが、一方は道徳的に賞賛に値し、他方は道徳的に忌まわしいものである全く正反対の 2 つの政治的運動の集会において利用されうるという教訓だった。私はこの教訓を決して忘れなかった。（Berger, 2011, p. 63）

こうした経験を含む南部的慣行の不快さはバーガーに改めて北部での勤務校を探させることになった。それは彼にとって否認しえない現実のアメリカの負

の側面であった。この時の経験が後にバーガーを「より人道的な社会への貢献」（Berger, 2011, p. 64）へと駆り立てたとされている。無論彼の最初期の著作もその成果の一端だった。『騒音』において、宗教に支えられた普通のアメリカ人の日常世界は間違いなく否定的に表象されている。

しかしながらバーガー自身が「『社会学への招待』は『不安定な情景』のある種の世俗化だった」（Berger, 2011, p. 75）と述べているように、その後彼は『招待』では社会を批判するにあたって、新正統主義神学ではなく様々の社会学説を援用するようになる。このような語り口の変化には、バーガーが『招待』では社会学者として価値自由な社会学の信奉を宣言したこと、その結果として、以降の彼の社会学的な著作では宗教的な関心が後景化していったことが関係している。しかし実はそれに加えて、ここには彼自身の信仰のあり方の変化も関わっていた。それは新正統主義神学からの転向という神学的立場の変化である。『聖なる天蓋』という作品に収められた補論によれば、その変化は、キリスト教の絶対性という新正統主義神学の前提を経験的に支持することはできない、すなわちキリスト教もまた数ある宗教の 1 つであるという自覚の深まりに由来していた（Berger, [1967]1969, pp. 183-4）。つまりここには、バーガーの信仰の少なからぬ動揺が関わっていたということである。その後彼は周知のように自由主義神学に依拠して独自の神学的探求を試みていくのだが、彼の 2 冊の小説はまさにその出発点に位置づけられるのである。

だがその一方で『騒音』におけるアメリカ社会批判が新正統主義神学に依拠していたとすれば、そこからの転向はまさにそうした批判の根拠の喪失も意味していた。確かに『招待』にも批判の方途は示されている。だが社会学的視座は批判のための道具は与えてくれても、批判の内発的契機そのものを与えてはくれない。事実、この信仰の動揺はバーガーにおけるアメリカ観の揺らぎとも時期的にパラレルだった。そのため今や彼にとって、アメリカは一方的な憧憬の対象でも、一方的な否定の対象でもない。つまりバーガーの〈アメリカ〉と現実のアメリカは複雑に分裂して交錯し、容易に重なり合ったり、単純に互いを反照したりしないのである。この動揺に伴う両義的なアメリカ観が彼の小説に象徴的に表現されており、そこからの思索の深化が後のアメリカ論につながっ

ていくことになる。したがってこれらの点を踏まえるならば、彼の作品連関における小説の位置づけが可能である。すなわち彼の小説は、社会学説と神学的議論、そしてアメリカ論をつなぐ結節点に位置しているのである。とはいえ彼の神学的探求の詳細はここでの主題ではないため、次節以降は本稿の目的に即して彼の小説を見ていこう。

3. 『飛び地』

2 冊の小説はいずれもバーガーの夏季休暇中の手慰みに書かれたものだった。執筆時期は 1 作目の『飛び地』が 1964 年の休暇であり、2 作目の『断罪の儀礼』が 1965 年から翌 66 年にかけての期間である（Berger, 2011, p. 85, p. 87）[7]。本節では時系列に沿って、まずは『飛び地』を取り上げる。

「ハンガリーは北極と赤道のほぼ中間に位置している」（Bastian, 1965, p. 1）という一文で始まる『飛び地』は不条理と諧謔に満ちた作品である。この一文に続いて冒頭の数ページでなされるのはハンガリーの地理的特性とハンガリー人（マジャール人）の性格についての長々とした説明であり、第 1 章の末尾になってようやく物語の主人公がごく簡単に紹介される。本筋とはほぼ無関係のこうした冗長な文章が伝えるのは、以下に続く物語は主人公のハンガリー的特性のために不条理な喜劇の様相を呈するだろうという予告である。

舞台は 1963 年のアメリカ。主人公のアッティラ・ハルシャーニはハンガリーからの亡命者で、カトリック系の女子大学でヨーロッパ史を教えている。大学は製油所とニュージャージー・ターンパイクという高速道路に挟まれた空気の悪い場所に位置していて、そこでの日常がアッティラの「至高のリアリティ」（Berger, 2011, p. 85）である[8]。しかし大学教師としてのアッティラの日常は様々の有限な意味領域（＝飛び地）に取り巻かれている。すなわち幼馴染イローナや黒人娼婦シャロンとの倒錯的な肉体関係（Bastian, 1965, pp. 23-41, pp. 134-52）、現在のトルコ辺りに古いマジャール人の末裔がいたという伝説をめぐる歴史学者イリングワースとの対立関係（Bastian, 1965, pp. 67-80）、公共図書館のマジャール人部門管理者のすげ替えを狙う陰謀（Bastian, 1965, pp. 94-133）等々である。これらはアッティラの通常の生活とは異なるリアリティを備

えた世界であり、例えば彼のセクシュアリティにおける倒錯性は次のように語られる。

> アッティラはサディストだった。言うまでもなく、われわれは専ら彼の性生活にのみ限定的に言及している。その他すべての社会関係においては、アッティラは普通以上に思いやりがあり、しばしば控え目でさえある人物だった。彼自身が〈状況〉(The Situation) と呼ぶ限定的な範囲の中でのみ、彼は拷問官、暴君、絶対的な〈支配者〉になった。
>
> これについて考える時、アッティラ自身は〈状況〉を、〈支配〉の確立という主導的なモティーフを備えた、絶えずくり返される芸術作品だと考えていた。芸術作品としてのそれはもちろん演劇のジャンルに属していた。〔……〕演劇的な出来事としての〈状況〉は脆弱な技巧であり、現実化を新たに試みる度に無数の仕方で脅かされ、大半の場合においてそれだけ一層不安定だった。というのも、その演者は新たに上演を行なう度に素早く、秘密裏に訓練を受けなければならなかったからである[9]。(Bastian, 1965, p. 24)

アッティラの日常はこのような、大学とは別のリアリティを持つ多元的な世界に取り巻かれている。物語のメイン・プロットは彼がこれらの世界を行きつ戻りつしながら日常世界の破綻を防ごうとするドタバタ喜劇なのだが、しかし物語の後半以降、彼と世界の主客は転倒し、アッティラは日常を守るための自らの役割に次第に翻弄されていくことになる。

発端はアッティラがシャロンを自宅に招いて「〈状況〉」を始めようとしていたところに、大学における上司であり、必ずしもその関係が良好とは言えないキーン神父が闖入してきてしまったことである。厳格なカトリックであるキーンは、独身であるはずのアッティラに彼と肉体関係にある女性、しかも娼婦らしき黒人の女性がいたことにひどく動揺し、それを咎めようとする。アッティラはその機先を制して、シャロンは自分の婚約者であるという偽りの「状況の定義」を創り出し、それをキーンに受け入れさせるのである。滑稽極まりないそのシーンは次のように描かれる[10]。

アッティラは、キーンが彼のショックから立ち直るよりも早くパニックから立ち直った。彼の愛人である黒人の大きな臀の後ろでベッドルームの扉が音を立てて閉まったとき、アッティラは彼の最も洗練されたアクセントでもって闖入者に語りかけた。

「どうやってこんな遅い時間に私の家に入ってきたのですか？」

キーンは立ち止まり、狼狽し、どもりながら言った。

「あ、扉が……扉が開いていて」

「ノックはしないのですか？」

「ああ……うん、いや……君が 1 人だと思ったから……」

局面の優位がまだ暫時こちらの側にあったまさにその瞬間、この緊急事態の解決策が完全な状態で、細部まで完璧に、一瞬のうちにアッティラの考えに浮かんだ。〔……〕

「親愛なるキーン神父、ノックもなしに不案内な部屋に入ってはなりません。けれどもあなたは入ってきてしまった。ええ。そのために私は今週末あなたに、そして他の皆さんにも伝えようと思っていたことをお伝えしなければなりません。私はあの若い女性と婚約しました。そのことを喜んでお伝えしたいと思います。シャワーに行く途中で幾分突然にそれを邪魔されてしまったあの女性です。ええ、神父、本当にあなたは彼女に謝らなければなりませんね。あなたのせいで彼女はバスローブを落としたのですから。あなたはそれだけ彼女を驚かせたのですよ」

「バスローブなんて見なかった」とキーンは弱々しく言った。

「彼女の名前はシャロンです」

「彼女は……つまりその、見たところ……彼女は黒人か？」

「ええ、シャロンは黒人です」ここでアッティラは少し止まり、顔をしかめ、そして鋭くキーンを見つめた。「あなたは、すべての人の中であなただけは、人種的偏見を持ってなどいないと思っていました。たとえ……」

「いや、いや……もちろん持っていないさ……君も知っての通り、次年度の講義では私も異人種間結婚を取り上げるのだし……カトリックの立場は……結婚の秘跡は人種によって縛られない……」

「ええ、もちろんそうですね」とアッティラは丁重に応じた。「失礼、これは愚かな発言でした。あなたが人種的偏見を持っているだなんて、どうしてそんなことを思ったのか。謝罪します、神父様」

おそらくここが、キーンがアッティラの定義したように出来事を受け入れた時点だった。〔……〕キーンの次の発言は彼をアッティラの準拠枠組みの中に正確に置き入れた。

「彼女はカトリックなのか？」(Bastian, 1965, pp. 172-3)

こうしてアッティラは自らの醜聞が広まるのを防ぐことに成功する。しかしこれが保身のための嘘であることが露見しないよう、アッティラはその後四苦八苦する羽目になる。同僚を招いた婚約披露パーティーなどの工作を経て、ついに彼は婚約の噂を聞き及んだオトゥール司教に見出され、公民権運動の活動家に押し上げられてしまうのである。カトリックにおける司教とは一般に、一定の司教区における最高教導権を持つ高位聖職者であり、小説内ではキーンですらその意向を絶えず気にかけている存在である。一介の大学教師であるアッティラに、司教の期待をはねつけることなど不可能である。次に示すのは、人種問題の改革に強い関心を寄せるオトゥール司教とアッティラとのちぐはぐなやり取りである。

「しかし……私には専門的な知識などありませんよ」とアッティラはかなり弱々しく言った。

「でも、君は黒人の女性と婚約している。そうだろう？」と司教は言い、不思議そうにアッティラを見た。

「はい、その通りです。ですが……」

「君のように教育を受けた人間なら、その結果としてより大きな人種的状況について何かしら考えたと思うのだがね」

「はい、考えました」とアッティラは不幸にも、あまり納得しないままに同意した。

長い、気まずい沈黙があった。その後司教はこう続けた。

「申し訳ない、ハルシャーニ博士。どうにかして君をまずい立場に置いてしまったとすれば、それは済まなかった。私は、おそらくすべきではない想定をしていた。もちろん私が聞いた君の婚約のために、私は、君が人種的偏見から全くもって自由だと、ひょっとするとこの問題に関して強い信念を持ってすらいると思っていたのだ。そして……」

「どうか謝らないでください」とアッティラは遮った。「あなたの想定は極めて……極めて論理的でした。そして確かに私は常に人種的偏見からは自由で、実際これについて常に強い信念を持っています」

「ふむ、ただ私は君の私的な生活を詮索しているという印象を与えたくはない」とオトゥールは続けた。「私は君の懺悔聴聞僧ではない。私はこの若い女性との婚約に至る君の経緯を知らないし、知りたいとも思っていない。けれども自分の想定が完全には外れていなかったというのは嬉しいことだ」

「はい、はい。決して外れてはいません」とアッティラは答えた。

　またしても沈黙が流れた。オトゥールが公式に発表された彼の婚約を信じていないというのがアッティラには極めて明白だった。オトゥールの明らかな鋭さを考えれば、これは驚きではなかった。アッティラを驚かせたのは、司教がそれを実際に信じているかのように会話を続けようとしている様子であることだった。気まずい時が過ぎていった。(Bastian, 1965, pp. 224-5)

オトゥールはこの後、夏に計画されているワシントン大行進の話を持ち出し、司教区内でそれに向けた委員会を立ち上げたいと告げる。さらに司教はこの委員会の委員長の座をアッティラに打診し、アッティラはそれを断ることができずに人種問題の改革者としてのキャリアを歩みだしてしまうのである。物語は1963 年 8 月 27 日、翌日のワシントン大行進に参加するためのバスに乗り込もうとしていたアッティラがイリングワースからの手紙を受け取ったところで終わりを迎える。

このようにアッティラは咄嗟の状況で自らに課した役割、すなわち黒人と婚約した大学教師という役割に縛られ、その役割期待に応える中で社会の激動に絡めとられていく。アッティラにはそこから逃れる道はなく、事態の進展に身を

委ねるしかない。アッティラが状況に抗する術を持たない理由の 1 つは、彼が信仰を捨てて久しい人物だという点にある。実際アッティラは小説内でデラニーという女学生に「私は何年も前に信仰を失った」（Bastian, 1965, p. 63）と告白している。この信仰の喪失ないし動揺ということが『飛び地』のサブ・プロットの 1 つであり、バーガーも英語版の自伝でそれを認めている。曰く、

> 私がこれを書いていたのは、若き日の新正統主義からの脱却により次のような問いを真剣に考えさせられていた時だった。すなわち、私は今や自分を無神論者ではないとしても、不可知論者として定義しなければならないのだろうか、ということである。（Berger, 2011, p. 86）

こうした状態の具体的形象が小説に描かれたアッティラの境遇である。つまり社会的リアリティを相対化し、その外に出るための超越的な視点が彼にはないのである。

それを象徴するように、物語の最後でアッティラがイリングワースから受け取るのはマジャール人の末裔の伝説が事実無根だったことを知らせる手紙である。イリングワースはある種メシア信仰的な期待を抱いてこの伝説が事実だったことを証明しようとした学者だった（Bastian, 1965, pp. 79-80）。その彼がトルコで発見した文書は、分かたれたマジャール人の王国を探し出すべく東方に派遣された大昔のハンガリー大使の古い報告書であり、そこには「東方に兄弟たちの国はない。他にハンガリー人はいない。われわれは地球上で唯 1 人だ」（Bastian, 1965, p. 230）と記されていた。これが『飛び地』の結語である。

したがってジェイ・メクリングが言うように、これは「内在の小説」（Mechling, 1984, p. 368）である。明らかにそこには先述のバーガーの信仰の揺らぎが影を落としている。くり返しになるが、『情景』や『騒音』において、バーガーは新正統主義神学の立場から人間社会のあり方を批判的に捉えていた。だとすれば、この神学からの離反はそうした批判の根拠を失うことを意味する。まさにそれがアッティラの置かれた状況だった。信仰を捨てて久しく、また『招待』に示されたような社会学的洞察を持ち合わせてもいないアッティラは、流され

るままに社会の趨勢に飲み込まれていくのである。

とはいえ彼を巻き込んでいく動きが公民権運動のうねりであるという点で、『飛び地』の時点でのアメリカ社会に対するバーガーのまなざしはまだ比較的好意的であるとも言える。ここにもまたバーガー自身の経験が反映されていた。彼は南部にいた 1950 年代に当地の人種差別的状況のみならず、当時まだ開始されたばかりの段階にあった公民権運動もいち早く目の当たりにしていたからである。先述の通り自伝によれば、バーガーは実際にキング牧師の集会にも参加していた（Berger, 2011, p. 63）。小説にも描かれているように、それは人種問題の解決へと向かう兆しであり、彼にとっては〈アメリカ〉の希望の光がまだ完全には途絶えていないことを示していたに違いない。事実、バーガーは公民権運動がアメリカ社会の偉大な達成であることをその後の著作でくり返し述べることになる。『飛び地』には彼のそうしたアンビヴァレントなアメリカ観が映し出されているのである [11]。

これは〈アメリカ〉に対するバーガーのある種の幻滅、ないしは彼における〈アメリカ〉への信頼の動揺がまだ決定的なものではなかったということを示唆している。だがもちろん個人を巻き込んでいく社会の論理は、公民権運動のような崇高な理念ばかりではなく、ときに残虐な行ないを人々に強いることもあるだろう。現実のアメリカ社会とて例外ではない。それが次作『断罪の儀礼』の主題である。

4. 『断罪の儀礼』

メクリングが「超越の小説」（Mechling, 1984, p. 373）と呼ぶこの作品の主題は神義論の問題である。自伝によれば、これがバーガーをしてキリスト教信仰を放棄させる寸前まで彼を悩ませた問題であり、『断罪の儀礼』はそれを象徴的に扱った作品だった（Berger, 2011, p. 87）。それは全能であり全き善である神がいかにして被造物における悪と苦を許しうるのかという問題である。この問題をめぐる作品内の宗教的な対話（Berger, 1975, pp. 156-64）は、後にバーガーの神学的な著作『天使のうわさ』（Berger [1969]1990）に引き継がれることになる議論だった [12]。この主題の深刻さを物語るかのように、小説全体の雰囲

気も『飛び地』とは対照的に重苦しいものとなっている。

物語は美しいスイスの町アスコナに住むオランダ人ヤーコプ・ファン・ビューレンがある年の夏の出来事を回想するという形で進んでいくが、彼は小説の冒頭でそのことについてある種の喪失感を抱えながら次のように語る。

> なぜ私がそもそもこれらの出来事の覚書を記しておきたいのか、という問いが残っていると思われる。それらの出来事は数年前、2、3 か月という短い期間に生じた。この小さなドラマの主要な登場人物たちは皆アスコナと私の人生から去ってしまった。そしてそのどちらにも戻ってくることはないだろう。けれどもこれらの出来事は、それを思考の外へ追い出したいという決心にもかかわらず、爾来私につきまとっているのである。〔……〕外面的には私の人生は何も変わっていないように見えるが、私は、何かが根本的に変わってしまったという感覚を片づけることができない。何かが、あるいは誰かが、取り消せない形で私に触れていったようなのだ。〔……〕
>
> 今また夏が来た。旅行者が戻ってくる。けれども私には分かる。私が考え続けている人たちは今年の夏のアスコナには、いや、おそらくもう 2 度とアスコナには戻ってこないのだ。夏と彼らの不在が相まって私の記憶と困惑を鮮明にしていく。だから私は自分の記憶を文章に残すことにした。それがある種の埋葬になるかもしれない。（Berger, 1975, p. 11）

ファン・ビューレンを物語内の出来事へと導いていくのは、不思議な魅力を持ったアメリカ人の美青年レイモンド・デルである。神義論の問題は許されざる悪、とりわけ無辜の子供の虐殺という罪に対するこの世の理を超えた断罪という形で提示される。具体的には、それは第 2 次大戦中にナチの戦争犯罪に直接関与したカーストマンへの断罪の宣告として示される。カーストマンはドイツ軍の特殊部隊として、ポーランドの共産主義者とユダヤ人数百人を虐殺した過去を持つ人物だった。こうした過去を悪びれもせず打ち明けたカーストマンに対してレイモンドが「自分自身に由来するのではない権威において」（Berger, 1975, p. 193）断罪を告げ、その数日後、ガス室に見立てられたガレージで何

者かに殺されたカーストマンの遺体が発見されるというのが物語の顛末である。

しかし先にも述べた通り、バーガーの神学的な思索はここでの関心の埒外にある。本稿にとって重要なのは、この小説が扱う宗教的な問題をめぐる印象的な場面にヴェトナム戦争を報じる新聞記事が関わっているということである。事実として『飛び地』と『断罪の儀礼』の執筆時期の間にはジョンソン政権による北爆の開始（＝ 1965 年 2 月）という重大な出来事が介在しており、これが小説世界に暗い影を落としている。そして実際 2 作目におけるアメリカの表象、とりわけアメリカの軍隊とその行動をめぐる表象には、前作とは異なり極めて批判的な調子が伴っているのである。

小説内でヴェトナム戦争の記事は 2 回登場する。最初はファン・ビューレンの運転する車で映画を見に行く際の車中でのレイモンドとの会話である。いつもは快活な彼がその日は沈んだ様子であることを訝しがるファン・ビューレンに、レイモンドは、朝の新聞でアメリカ軍による無差別爆撃の記事を読んだのだと答える。（以下の下線は引用者による。）

「今朝､決定的なミスをしてしまったんだ」と彼は言った。「新聞を読んだのさ」
「一体何を読んだんだ？」と私は尋ねた。

彼はミラノの朝刊を引っ張り出した。1 面に掲載された 1 つの記事がインクでしるしをつけられていた。

「読んであげよう」と彼は言って、流暢なイタリア語に切り替えた。「われわれの特派員は、ヴェトコンの部隊を匿っていると疑われた村に対する作戦から帰還したばかりのパイロットの 1 人にインタビューをした。彼はその若いアメリカ人に、女性や子供がいる村への爆撃についてどう感じているのか尋ねた。<u>そのパイロットは、もちろん自分はこうしたことを好んではいないが、ヴェトコンを効果的に殺す方法は他にないのだと答えた。さらに彼は、この戦争に勝つために必要なことのすべてがなされねばならないと付け加えた。</u>彼はこの問題に心を乱されてなどいないようだった」

私は何も言わなかった。レイモンドは新聞をじっと見つめ、それをシートに置いた。

「君は戦争に行った。そうだね？」と彼が尋ねてきた。
「ああ、行ったよ」
「女性や子供は撃ったかい？」
「いや、撃たなかった。でも時々、これは単なる幸運に過ぎなかったんじゃないかと考えることがある。例えば、海軍ではなく空軍に所属するということもあり得たんだ。戦争中、ドイツだけでなく日本においても連合軍がどうやって街を爆撃したか知っているよ」
「誰かを殺したかい？」
私は返事をしなかった。戦争中の悪夢について話す気分ではなかった。映画館へと車を走らせている明るい夏の朝に、そうした気分にはならなかった。それでも私は、一連の顔が次から次へと私の心の目に過去を駆け巡らせるのを防ぐことができなかった。〔……〕
「済まない。聞くべきではなかったな」と寸時の後レイモンドは言った。「今はちょっと憂鬱なのさ。アメリカ人だからね。他人の殺人について聞いてみたかったんだ」（Berger, 1975, pp. 72-3）

これに続けてレイモンドは、戦後のドイツで一時期アメリカ軍の従軍牧師の助手だったという自身の過去をごく簡単に語り、軍隊の一員であることと神の僕であることとの間に矛盾を感じたことがあると打ち明ける（Berger, 1975, pp. 73-4）。

次にヴェトナム戦争の記事が登場するのは、レイモンドがカーストマンに断罪を告げることになるパーティーに行く直前に、カフェでファン・ビューレンが新聞を読む場面である。

新聞は私を元気づけるようなものではなかった。この夏の数か月間そうであったように、新聞にはヴェトナムに関する話が満載だった。共産党の工作員（かもしれない男性）がサイゴンで公開処刑されている写真が掲載されていた。子供のような痩せた身体が処刑柱に縛りつけられ、崩れ落ちていた。背後に立っているのはアメリカ軍将校の制服を着た男だった。その男が本当

にアメリカ人なのか、アメリカ軍の制服を着た南ヴェトナム人なのか知りたくて私はその写真を綿密に調べたが、写真の顔はあまりにも不鮮明で判断できなかった。その写真と同じ紙面に南ヴェトナムの首相に関する特電があり、首相がかつて彼に帰せられた発言、すなわち彼がアドルフ・ヒトラーの大いなる賞賛者だという趣旨の発言を力強く否定したと伝えていた。私は嫌悪感と共に鼻を鳴らし、新聞をポケットにしまった。(Berger, 1975, p. 178)

実はこのシーンはバーガーが実際にスイスで読んだ新聞記事を基にしている。そのエピソードは後述する 1970 年の論文で紹介されている。彼の読んだ新聞にはヴェトコンを拷問する南ヴェトナムの兵士とその傍らに立つアメリカ軍将校の制服を着た男性の写真が掲載されており、バーガーもその男性がアメリカ人なのかどうか確かめようとしたという。そして彼はそれを見て、「こんな悲惨なことはやめなければならないという差し迫った、抗いがたい確信」(Berger, 1970, p. 68) を抱いたと述べている。小説内では、直接的にはこの記事が引き金となってカーストマンとの対決が始まっていく。

上記の新聞記事が伝える残虐さに憤るファン・ビューレンに対して、カーストマンはこの出来事がそれほど思い悩むべきものではないと主張する。それは力の行使に伴うやむを得ない事態だというのが彼の持論である。

「なぜこの写真にそんなにも心を乱されるのですか、ファン・ビューレンさん」とカーストマンが尋ねた。

「野蛮さに心をかき乱されているのです」と私は答えた。「あなたはそうはならないのですか？」

カーストマンは愛想よく笑った。「それはあなた、リベラルな人道主義者の悩みですよ。特にアメリカ人の悩みですな。彼らは世界的な大国になったが、まだ偏狭なプチブル国家のような考えを持っています。彼らは力を気にしない。それを楽しんでさえいる。でも彼らは力の道徳的代償を受け入れたくないのですよ。あなたもそれと同じのようですね」

「力の道徳的代償というのは？」とレイモンドが聞いた。

「血。そして罪ですな」とカーストマンは答えた。(Berger, 1975, p. 186)

こうして自説を展開していくうちに、カーストマンは先述の第２次大戦中の自身の戦争犯罪を告白することになるのだが、その言い分は先に見た「自己欺瞞」の論法に驚くほど酷似している。(以下の下線も引用者によるものである。)

「私は軍にいました。私には、自分がナチだったのかどうかということすら定かではありません。私はドイツ人でした。そして私は自分がすべきことをしたのです。楽しくはありませんでしたが、私がやらなければ別の人がそれをすることは分かっていました。」彼はそこで再び止まり、続けるのをためらった。「ともかく、昔の恐ろしい話をする必要はないでしょう。私がファン・ビューレン氏に言いたかったのは単純なことです。――もしそれが偶然にも自身の身にのしかかるなら、人は力の重荷を引き受けねばならないということです。他にできることはありません。また重要なことに、それが義務であるというただそれだけの理由で、楽しくなくともしなければならないことを人はするし、なされねばならないことの限界の中で人道的であろうとすらするのです」(Berger, 1975, p. 187)

あるいはカーストマンは次のようにも語る。

「教えてくれないか」とレイモンドはいまだ変わらぬおとなしい調子で話を遮った。「君はどうやって『なされねばならないことの限界の中で人道的』だったんだ？」
「ドイツで病気休暇をとっていた私の前任の隊長は処刑の前に共産主義者を拷問にかけていました。私はこの慣行をやめたのです。ユダヤ人に関しては……」ここで再びカーストマンは肩をすくめた。「数百人を撃たねばならない時、つまりすべての家族、男性、女性、子供を撃たねばならない時は、特に人道的であることなどできませんね」
「撃たねばならないだと？」私は叫んだ。〔……〕

「他に選択肢はありませんでした。それが私への命令だったのです」(Berger, 1975, p. 189)

このように述べるカーストマンは、戦争中の自らの行動に対して彼が何の罪悪感も抱いていないことをくり返し明言する（Berger, 1975, p. 188, p. 191）。彼はファン・ビューレンに、だからヴェトナムのことを気に病む必要はないと諭すのである。しかしヴェトナム戦争とナチの虐殺を並べて語るカーストマンに、ファン・ビューレンは怒りを爆発させる。

私は声を制御できなくなりながら問いかけた。「ではあなたは、アメリカ人がヴェトナムでやっていることが自分の野蛮な行ないに比せられると考えているのですか？」

カーストマンはまたしても肩をすくめた。「もちろん細かい部分ではいくつかの相違がありますよ」と彼はなだめるような調子で言った。「それにアメリカ人の行動はわれわれのよりも合理的だと認めましょう。ユダヤ人に関わる仕事のすべては非合理的な狂信でした。アメリカ人は軍事的必要から行動しているのだと思います。や、あなたはアメリカ人でしたな、デルさん。あなたは私の類比を認めてくれますかね？」

「僕はあまり熱心なアメリカ人じゃない」とレイモンドは答えた。「でも僕の知る限り、アメリカ人は子供を撃ってはいない」

「そうですね」とカーストマンは同意した。彼の声の調子は変わらなかった。「あなた方は子供がいると知りながらその村にナパーム弾を落としているだけです」(Berger, 1975, p. 190)

この後にレイモンドによる断罪の宣告のシーンが続くが、ここに描き出されているのはすぐれてドストエフスキー的な「罪と罰」の問題である。カーストマンは、ただ社会が自分に課した要求に従っただけなのだから自分に罪はないと言う。社会の利益は非道な行為をも正当化しうるということである。それに対してファン・ビューレン、レイモンド、そして彼らを描くバーガーは、そこ

には個人の責任における罪への直接的関与があり、それには罰が、とりわけ許されざる罪には神的な次元の罰が下されねばならないとするのである[13]。

これが物語のクライマックスである。すでに述べた通り、ここに描かれた神義論の問題はその後の神学的著作へと昇華されていく。だがそれと同時に、ここにはバーガーの揺れ動くアメリカ像も映し出されている。見てきたように、彼が新聞記事のアメリカ人パイロットに言わせた発言、そしてまたカーストマンに言わせた発言には、真実彼自身が社会学的議論において取り上げた問題が反映されていた。すなわち「自己欺瞞」の問題である。間違いなくここにおいて、現実のアメリカに対するバーガーの批判的なまなざしはこの上なく鋭いものとなっている。今や彼は、アメリカもまたその軍事的行動において自己欺瞞的態度の下に許されざる罪に加担しているのではないかという疑念に向き合わざるを得ない。それは彼が、自身にとって約束の地であり、自由を保障するはずだった〈アメリカ〉の理念に対する根源的な不信を振り払えなかったことを意味する。その疑念は小説内で提起されていたように、実際のアメリカはその本質においてナチス・ドイツと変わらないのではないかという問いへと連なっていたはずである。もしそうだとすれば、現実のアメリカ社会にもまた神的な罰が下されるべきなのだろうか。だがそもそもアメリカという集合体全体の罪を問うことなど可能なのだろうか。バーガーの 2 作目の小説からは、彼が 1960 年代に周知の社会学説の著作を著しながら、その裏ではアメリカの意味をめぐるこうした陰鬱な問いについての思索を続けていたことが窺われる。その結果として、神義論の問題が新たな神学的探求へとつながっていったように、これらの問いをめぐる思索は 1970 年代以降のアメリカ論へと結実していくのである。

5. バーガーとアメリカ

ここで 1 度これまでの議論を概括しておこう。渡米前のバーガーは〈アメリカ〉に対する大きな希望を抱いていた。それは新正統主義神学の影響下にキリスト教徒として形成された彼の召命の感覚に支えられていたが、渡米後はまさにそのキリスト教信仰が彼をしてアメリカの現実に対して批判的な態度をとらせることになった。ところがその後彼の信仰の動揺に伴い新正統主義神学の立場は

放棄され、それと共に実際のアメリカに対する評価も一義的なものではなくなっていく。そうした中でヴェトナム戦争の現実は改めてバーガーのアメリカ観を大きく揺らがせることになった。以下に見ていくのは、それを受けた懊悩の末に導き出されたであろう、現実のアメリカに対する彼の基本的な態度決定の概略である。

バーガーがヴェトナム戦争に一貫して反対していたことは様々の著作で明らかにされている。公民権運動を支持し、ヴェトナム戦争に反対するというこの立場は、1960 年代以降のアメリカの種々の抗議運動にぴったりと重なるかのようである。周知の通り、この時期には彼だけでなく、アメリカ全体がアメリカの意義をめぐって反省し、激論を交わし、それでもなお一義的な答えが見出されずに彷徨っていた。そのような状況の中で社会的世界の相対性、構成性、それゆえの可変性を説くバーガーの社会学説は、しばしばラディカリズムの知的淵源の 1 つだとされてきた。しかしながら彼は同時代のラディカルな運動からは常に慎重に距離をとろうとしていた。なぜか。その理由を明らかにすることが 1970 年代以降の彼の立場を理解するための鍵となる。冒頭で示唆したように、手がかりは現実のアメリカに対して彼が抱えていたアンビヴァレンスとバイアスである。それらは、彼が自身の政治的立場を初めて語った 1970 年の論文「体制と群衆の間で」から窺い知ることができる [14]。

ヴェトナム戦争に関して言えば、バーガーがラディカルから距離をとるのはこの戦争に反対する理由の相違のためだった。バーガーによれば、ヴェトナム戦争への彼の反対は子供の住む村へのナパーム弾の投下は間違いだという単純な確信に基づいていたが、ラディカルたちは非人道的行動に対してではなく、アメリカの帝国主義に反対していたからである（Berger, 1970, p. 43）。バーガーはここにラディカルにとっての反帝・反米イデオロギーの重要性を見出し、その根底に、救済にも似た暴力的な体制変革を希求するユートピア主義の存在を認める。このイデオロギーのプリズムを通して見るとアメリカ社会は「絶望的に腐敗した」（Berger, 1970, p. 59）ものとして現れるが、果たしてそれはアメリカの実相だろうか。「否」というのが彼の答えである。

> 確かに神の国と比べれば、あらゆる経験的社会は大半が破滅的なものに見えるだろう。私はこのメシア的ヴィジョンを嫌う訳ではないが、その空想的エクスタシーによって他者を殺す権利を認めはしない。ユートピア主義の歪曲から解放された眼でアメリカ社会を見てみれば、それは意外にも思いやりのある達成に満ちた社会として現れる。より重要なことに、それは道徳的異議申し立てや人間の必要に応じて自らを再構成する能力を著しく持った社会として現れる。ユートピア主義的精神の非合理的な憤りは今ある現実の認識を歪めるだけでなく、おそらく未来の可能性、その実現のためには明晰な見解と節度ある行動が必要となるような未来の可能性も排除してしまうのである。（Berger, 1970, p. 59）

このように述べるバーガーの念頭には、自らが実地に見聞きしてきた公民権運動の記憶があったのではないかと思われる。かくして彼はイデオロギー的歪曲に曇らされることのない認識の必要性を説き、公民権運動をはじめとするアメリカ社会の偉大な達成を認める。しかしバーガーはそこからさらに 1 歩先へ進み、より積極的な価値判断をも下そうとする。すなわちバーガーは、軍事力を含むアメリカの力を敢然と肯定しようとするのである。まさにこの部分に彼自身の個人史的事情が深く絡んでいる。1970 年の論文から 10 年後の論考になるが、そこで彼は次のように述べている。

> 私はオーストリア生まれの者として、ヨーロッパをヒトラーから救ってくれたのはアメリカの軍事的介入であったこと、アメリカの帝国的権力はスターリンとその後継者から自分の生まれた大陸を守り続けてくれていたことを決して忘れることができない。（Berger, 1980, p. 31）

このためにバーガーはアメリカの力が結局は必要なものであることを認める。1970 年論文では「同世代の多くの人たちと同じように、私にとってもナチズムとの対決がこの問題にきっぱりと決着をつけた。ナチズムに対する武装は正しいだけでなく道徳的に必要だった」（Berger, 1970, p. 54）とも述べられている。

1960 年代中葉に彼を悩ませていた問題に対する 1 つの答えをここに見出すことができる。『断罪の儀礼』においてバーガーはカーストマンに、武力行使には必然的に「血と罪」が伴う、そしてそれは避けられない事態なのだからナチス・ドイツもアメリカも本質的には同じなのではないかと語らせていた。上の引用が示すように、今やこの問題に対してバーガーは、自身が亡命を余儀なくされた経験に基づいて両国を区別し、アメリカの力を道徳的に正当化しようとしたのである。また彼にとってそれは過去の出来事においてだけでなく、同時代のソ連の全体主義との対峙においても必要な力だった。このように、亡命者として故郷を追われ、アメリカの武力によって守られたという経験がバーガーによるアメリカの意義の承認の核心にある[15]。おそらくこれは、ナチから逃れてアメリカにたどり着いた 20 世紀の亡命知識人の多くに共通していたある種のバイアスであろう[16]。バーガーがラディカルではなく保守の立場を選んだことの背景にはこのような個人史的事情も絡んでいた[17]。だが無論、そこに葛藤がなかった訳ではない。

すでに示唆したように、この葛藤はヴェトナムでのアメリカ軍の非人道的な行動に関わるものだった。アメリカはナチス・ドイツではない。とはいえ、力には常に「血と罪」が付随しうる。これらはどのように評価されるのだろうか。まずアメリカ軍による行動、すなわち「無差別爆撃、文民への爆撃、そして広範囲にわたる国土の荒廃」について言えば、バーガーはそれを「この戦争の特殊な非人間性」だとして強く非難していた（Berger, 1970, p. 66）。ここにおいて彼は先のカーストマンの発言を半ば受け入れ、半ば拒んでいる。バーガーはアメリカの力を承認することを選ぶ。そしてそこには確かに「血と罪」が付きまとう可能性がある。そのことは否認できない。バーガーはリアリストとして、人間の世界には不可避的に陰惨な側面がありうることを十二分に理解していた。しかしながら、それは決していついかなる時でもこの「血と罪」を容認するということではない。つまりアメリカの力の正当化はその軍事的行動の無条件の肯定ではないのである[18]。ここにアメリカに対する深い謝意と、それにもかかわらず（いや、むしろそれゆえにこそ）抑制されない批判的精神との深刻な相剋と葛藤という、バーガーの抱えていたであろうより一層深いアンビヴァレンス

が垣間見える。アメリカは確かに強大な力を有しており、それは世界秩序の中で不可欠の位置を占めていると彼は考えるのだが、だからこそそれだけ一層その力の使い方を誤ってはならないとされるのである。

では、アメリカ軍の罪に関してはどうだろう。ヴェトナムでのアメリカ軍の非人道的な行動を受け入れ難い罪と見なすなら、アメリカの人々は一様にそれに対する罰から逃れられないのだろうか。これもまたバーガーの『断罪の儀礼』から必然的に導き出される問いである。彼はこれについては罪と責任を区別する形で答えを提示する。これが彼とラディカルとを分かつもう 1 つの分岐点であり、それは自己欺瞞論の正確な裏返しとなっている。バーガーは 1960 年代後半のアメリカで革命を唱道する人の心情には、アメリカ人であることを理由としたマゾヒズム的な罪の引き受けがあると見ていた。これは国内の人種問題や海外での非人道的行動のすべての罪をアメリカ人である自らに着せようとする心理である。バーガーはその根底に真に人道的な動機がある可能性を認めながらも、そうした心情を批判する。単にアメリカ人であるというだけで国内や他国の惨状に罪を感じる必要はないと彼は考える。集団的な罪と個人の責任は区別されねばならないというのである。曰く、

> 集合的な罪などというものは存在しない。自らの所属する政治的共同体によってなされることに対する責任、これは存在する。だが罪はない。つまり行為によってであれ行為以外によってであれ、当該の行動に個人として関与していないのであれば、その人に罪はないのである。世界の反対側でアメリカの軍服を着た人によってなされる行為に対する罪は私にはない。〔……〕もしその行為が悪しきものであれば、それを防ごうとする、あるいは少なくともそれに抗議をする責任が私にはあるし、それをしないのであれば私には罪がある。しかし国民であれ、国家であれ、何らかの「運動」であれ、いかなる集合的存在も、私がその一員であるということだけで私を罪に巻き込むことはできないのだ。（Berger, 1970, p. 62）

このようにバーガーはあくまでも個人としての罪への関与と責任を問う。彼

の自己欺瞞論は、人間が何らかの役割や集合的アイデンティティの権化ではなく、個人として本来的に自由であるからこそ、それらの遂行には責任が伴うと説いていた。バーガーはここでその立場を正確に踏襲している。責任を引き受けることは自由であることの裏返しである。そして先に見たように、バーガーにとっての〈アメリカ〉は、何よりもまず集合的なカテゴリーに解消されない個人の自由を可能にしてくれる場所だった。必要なのは盲目的な罪悪感の享受ではなく、なすべきことを明確に認識し、その責任を引き受けることなのである。それがアメリカ人であることの意味についての彼自身の決断でもあった。

> アメリカが有する人間に対する約束と脅威は隣り合って大きくなっている。世界を変える力と世界を台無しにする力が。〔……〕今日アメリカの愛国心が意味するのは、何よりもまず個人的かつ政治的にこの劇に参加することであるように思われる。〔……〕私が考えているアメリカの劇への参加は自由な個人による参加である。自由は「体制」による吸収を拒否することを意味している。自由はまた、何らかの「群衆」に「吸収」されることの拒否も意味している。(Berger, 1970, p. 85)

ここで言う「体制」は無論アメリカの支配体制のことであり、「群衆」は様々のラディカルな抗議運動を指している。それゆえここには、単なるアメリカの礼賛に終始する頑迷な保守とそれに対する全面否定を叫ぶラディカル双方への決別が表明されている。これは「信条の欠如による保守主義者」(Berger, 1970, p. 21）という彼の政治的な立場とそれに伴う個人的な決意の表明である。かくしてバーガーは自由な個人としての責任においてアメリカ社会にはたらきかけるべく、この時期以降様々の活動に携わっていくことになったのである。

6. おわりに

本稿は 1970 年代以降にバーガーが保守の立場からアメリカ論を展開するようになった契機を、彼の個人史的な事情を踏まえながら探ってきた。それを通して見えてきたのは、自らを救ってくれたアメリカに対する深い恩義を感じつつ

も、責任ある知識人としてそれに批判の矛先を向けざるを得なかったバーガーのアンビヴァレントな立場である。

バーガーにとって〈アメリカ〉は、何よりもまず個人が個人として、集団に併呑されることなく自由に生きることのできる場所だった。無論これは彼にとっての理念的なアメリカ像であり、現実としてそうであったのかどうか、さらには、生得的ないしそれとは別の形で付与されたスティグマのためにこの理想から排除された人々がいまだに存在するのではないかということは、今は措いておく。少なくともバーガーにとって、すなわち亡命者となることを余儀なくされ、安住の地を求めて渡米した彼にとっては、〈アメリカ〉はそのような憧憬の対象だった。しかしながら他方で、バーガーはそうした自由をその脅威から守り、保証するためにはアメリカの軍事力が不可欠であることも理解していた。バーガーの個人史的背景からしてこのアメリカの強さという事実は決定的に重要なものであり、彼による現実のアメリカの意義の肯定も究極的にはこの点に依拠していたと言ってよい。もっとも、彼においてこの認識はその強大さに伴う代償と危うさの意識とも表裏一体だった。そのことは世界政治の舞台におけるアメリカの力の承認とその使い方に対する慎重な姿勢に反映されており、具体的にはヴェトナム戦争に断固として反対しながら、その武力も含めてアメリカ社会の偉大な達成を評価する立場として表明された。1970 年代以降のバーガーが現実主義的な路線の保守を選んだのも、まさにこうした意識のためであった。その後の 1990 年代における第 2 世代のネオコンやニューハウスを中心とする神政保守との決裂は、バーガーのそうした立場を象徴的に示したと言えるだろう（池田、2023、pp. 173-98）。

以上の議論は特に亡命者としてのバーガーの側面を明らかにするものであるが、ここからいかなる展望が開けるだろうか。ヨーロッパでの全体主義の台頭と第 2 次大戦の勃発は当地の多くの知識人に亡命者となることを強制した。彼らの多くは開戦前のヨーロッパですでに知的、精神的な成熟を遂げていた。それに対してバーガーはそうした亡命知識人たちとは異なり、幼少期に故郷を追われ、大戦後アメリカに渡ってから本格的に学問的修練を積んだ世代に属している。この世代的懸隔は彼らの取り上げた主題の相違にも現れている。例えば

バーガーの母校であるニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチに集った知識人に限っても、エミール・レーデラーの大衆社会論（Lederer [1940]1967）、ハンス・シュパイアーのホワイトカラー論（Speier 1986）、アルベルト・ザロモンの社会学史研究（Salomon 1955）、そしてハンナ・アーレントの種々の著作がそれぞれ何らかの形で全体主義を主題的に扱っていたのに対して、バーガーにおいて全体主義論は必ずしも中心的な主題ではなかった。このような相違はおそらく、上の世代の亡命者にとって全体主義は彼らが知識人としてヨーロッパで経験した同時代の生々しい記憶であり、それゆえに直接対峙し、解明すべき最重要の事象だったという一方で、バーガーにとってはアメリカ社会の混迷の方がそれよりも喫緊の現代的問題だと思われたということによるのだろう。

だがこうした世代的な相違も確かにあるとはいえ、それでもやはりナチの手から逃れるために故国を去ったという経験は、ここに見てきた通りバーガーの思索にも拭い去ることのできない決定的な刻印を残した。そうであるとすれば、彼もまた遅れてきた亡命知識人としてその思想史に彩を加える存在である。言葉を換えるなら、20 世紀の亡命知識人の思想史には周知の第 1 世代の続きがあるということである。こうした視角からアメリカの社会学説史や、保守主義を含むアメリカの社会・政治思想史を改めて捉え直すことは今もって重要な課題のはずである。この点を示唆することで、本稿の結びとしておきたい。

注

1 池田直樹はバーガーの多岐にわたる思索を時系列に即してほぼ網羅的に追跡している。本稿で扱う問題については、バーガーのある種保守的な傾向を孕んだキリスト教信仰が当時の思想的、社会的な文脈の中で現実の保守主義へと具体化していったという見解が示されている（2023、pp. 104-16）。だが同書にはバーガーの個人史的な側面からの議論、つまり以下に述べる亡命者としての彼とアメリカ社会との関係という論点が欠けており、この点でそれはまだ不十分な見解である。

2 しかしその僅かの例外であるサミュエル・ハイルマンの研究もモダニティと多元主義という論題に焦点を合わせてバーガーの経験を論じたものであり、特にアメリカとの関係を主題化している訳ではない。

3 バーガーの小説を取り上げた研究は僅かながら存在しており（Mechling, 1984; Martin, 2001）、いずれも彼の社会学説や神学的議論との関連においてそれを論じている。しかし彼のアメリカ論と関わらせる形でそれを扱ったものはまだない。

4 このフリッツ・ノイマンとは、バーガーがその最晩年の良心論で度々その名に言及しているフレデリック・ノイマンその人である。

5 この過程の詳細については池田の議論（2023、pp. 44-78）を参照。

6 バーガーのこの議論は、ラルフ・ダーレンドルフの『ホモ・ソシオロジクス』が引き金となって 1950 年代から 60 年代の西ドイツで生じた、いわゆる役割論争を想起させるものである。実際バーガーの言う「自己欺瞞」的な人間はダーレンドルフにおける疎外され、単なる役割演技者となった「ホモ・ソシオロジクス」とほぼ同義であり、本来的に自由な存在というバーガーの人間観は、ダーレンドルフが「ホモ・ソシオロジクス」に対置する「全体的人間」の概念にぴったりと重なるかのようである。だが無論両者の間には相違もある。バーガーにおける個人と社会の関係は決して一方的な強制に尽きる訳ではない。周知のようにバーガーは役割に具現された社会の制度的秩序の人間的起源も説くからである。それはつまり、人間に対してときに抑圧的、拘束的作用を及ぼす社会の論理も元来は人間の所産であるということである。バーガーの社会学説は役割を通じた社会秩序の要求の客体性を論ずる一方で、当の社会秩序の成立における人間の主体的契機も説くのである。彼の議論が人間と社会の〈つくり／つくられ〉論たる所以である。とはいえ一見したところ深い関連性を持つように思われる上記の議論からすると不思議なことに、バーガーの著作に役割論争についての立ち入った論及は見られない。なぜだろうか。今のところその理由ないし消息の解明には推量以外の手立てがないが、当時この論争に深く関わっていた論者の 1 人であるフリードリヒ・テンブルックとバーガーとの個人的な反目はその遠因の 1 つに数えられるかもしれない。この諍いについては高艸賢（2024）の議論を参照。

7 前述の通り 1 作目はフェリックス・バスティアンという筆名で刊行されたが、バーガーによれば、その理由は自らがアメリカ社会学において周縁的な存在であるという意識、そして文学者と見なされたくはないという思いだった（Berger, 2011, p. 85）。だが 2 作目が刊行された 1975 年の時点では、自分がアメリカ社会学の世界で確固たる地歩を固めたという自負があったため本名での刊行になったのだという。刊行が執筆時期より

十年ほど遅れたのは、ダブルデイ社からの出版を断られたからであった。その後バーガーは同作の発表をほぼ断念していたが、友人のリチャード・ジョン・ニューハウスに草稿を見せたところ、彼から出版を強く勧められ、宗教系出版社であるシーベリー社から刊行される運びになったとのことである（Berger, 2011, p. 87）。

8 英語版の自伝では作品の説明にアルフレッド・シュッツの用語が用いられていることから分かるように、『飛び地』は「シュッツの『多元的リアリティ』の概念のある種文学的な例証」（Berger, 2011, p. 84）でもあったという。

9〈状況〉が支配の確立をめぐる営みの場だというこの記述は示唆的である。小説では人種関係をめぐる状況（黒人と白人）、人間関係をめぐる状況（アッティラとその周囲の人物たち）、そしてセクシュアリティをめぐる状況（アッティラとイローナ、シャロン）が様々に描かれており、特にアッティラとシャロンの〈状況〉にはセクシュアリティと人種をめぐる問題がアイロニカルに重ね合わされているとも言える。このように「状況」という言葉は、様々の力――支配の確立をめぐって現実を不安定化させる力と安定化させる力――がせめぎ合い、一見すると固定的な現実の本来的な脆さが露呈する場面の象徴となっているように思われる。この点は文学的な技法としても興味深いが、それはまた同時にバーガー社会学の洞察にも通底している。周知のようにバーガーの社会学説は、一見したところ安定した日常世界にもそれを安定させるための様々のメカニズムがあること、それゆえ日常世界は本来的に脆弱な「不安定な情景」であることを説くものだったからである。

10 引用文中の強調は原文による。以下、特に断らない限りはすべて同様である。

11 例えばここに社会学者ハロルド・ガーフィンケルの小説との相違を見出すことができるだろう。ガーフィンケルの『カラートラブル』も人種問題を扱った作品だったが、そこに描き出されたのは、行為者の志向する世界の複数性という形でのアメリカの分裂の萌芽だった。この点に関しては浜日出夫（1998）やダーク・フォン・レーン（2014=2024、pp. 27-54）の議論を参照。

12 実際に小説のあとがきでも 2 つの著作の関連が述べられているが（Berger, 1975, p. 208）、その詳細についてはバーニス・マーティンの論文（Martin, 2001）を参照されたい。

13 これが『断罪の儀礼』の中心的な主題と結論なのだが、そうだとすればバーガーの「自己欺瞞」論はドストエフスキーの『罪と罰』の主題の社会学的な変奏だったと考えられる。

これはバーガーにおける宗教的関心の社会学的翻案の一例であろう。実際ドイツ語版の自伝によれば、フリッツ・ノイマンの妻であったエディット・ノイマンからドストエフスキーを読むよう勧められたバーガーは、『罪と罰』から読み始めてその後ドストエフスキーの全作品を読破したという（Berger, 2008, p. 168）。

14 この論文が収録されたニューハウスとの共著の序文には「本書がその一部となっている対話は政治ではなく神学を出発点としていた。実際、われわれが初めて会った時も、われわれは子供の死と神の正義の矛盾について語り合った」(Berger & Neuhaus, 1970, p. 7）とあるように、同書と『断罪の儀礼』の間には明らかな連続性がある。

15 おそらくこの点にバーガーと、彼より若いアメリカ生まれのラディカルな社会学者との決定的な相違を見出すことができるだろう。後者にとってはまさにそのようなアメリカそのものが拒絶の対象だったからである（Gitlin, 1995; Sica & Turner eds., 2005）。

16 ピーター・M・ラトコフとウィリアム・B・スコットも、ニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチの亡命知識人たちの社会主義的理想がアメリカの体制の支持へと変化したことについて次のように評している。「『全体主義的』政府に対する彼らに共通の嫌悪によって、彼らは『リベラルな』デモクラシーの価値に対する彼らの相互的な支持を認識するようになった。〔……〕全体主義を個人の自由と議会制デモクラシーへのアンチテーゼと見なすことによって、大学院のメンバーは社会主義の観点とリベラリズムの観点を、アメリカの立憲主義的デモクラシーの擁護へと融合させた。しかしながらそうすることにおいて、彼らは、自身が若き知識人として奉じてきた理想を意図的に曲げることになったのである」(Rutkoff & Scott, 1986, pp. 126-7)。

17 バーガーの政治的立場のこのような背景は、彼が一時的に接近していた第 1 世代のネオコンの中心的メンバーだったアーヴィング・クリストルやダニエル・ベルが、スターリニズムへの幻滅のために左翼から保守へと徐々に転向していったという経緯とは大きく異なるものである。

18 バーガーは英語版の自伝でも「私は第三世界におけるアメリカの政策のすべてに対して無批判である訳ではないし、それは若き日のヴェトナム戦争への反対からジョージ・W・ブッシュのウィルソン的な民主主義至上主義に対する異議にまで続いている」(Berger, 2011, p. 176）と述べている。

文献

本文中の引用はすべて筆者が原典から直接訳出したものであるが、文脈に応じて既存の邦訳とは異なる表現を用いている箇所もある。

池田直樹、2023、『ピーター・L・バーガー――分極化するアメリカ社会と対峙した社会学者』ナカニシヤ出版。

高艸賢、2024、「戦後ドイツ社会学史の舞台としてのフランクフルト大学――経済・社会科学部の社会学者たちから見た社会研究所」『思想』第 1208 号、82-96 頁。

浜日出夫、1998、「エスノメソドロジーの原風景――ガーフィンケルの短編小説『カラートラブル』」、山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房、30-42 頁。

Bastian, Felix, 1965, *The Enclaves*, New York: Doubleday.

Berger, Peter L., 1961a, *The Noise of Solemn Assemblies: Christian Commitment and the Religious Establishment in America*, New York: Doubleday.

――――, 1961b, *The Precarious Vision: A Sociologist Looks at Social Fictions and Christian Faith*, New York: Doubleday.

――――, 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*, New York: Anchor Books.（= 1979、水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社。）

――――, [1967]1969, *The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion*, New York: Anchor Books.（= 1979、薗田稔訳『聖なる天蓋――神聖世界の社会学』新曜社。）

――――, [1969]1990, *A Rumor of Angels: Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural*, New York: Anchor Books.（= 1982、荒井俊次訳『天使のうわさ――現代における神の再発見』ヨルダン社。）

――――, 1970, “Between System and Horde: Personal Suggestions to Reluctant Activists,” Peter L. Berger & Richard John Neuhaus eds., *Movement and Revolution: On American Radicalism*, New York: Anchor Books, 11-81.

――――, 1975, *Protocol of Damnation: A Novel*, New York: The Seabury Press.

――――, 1980, “Indochina & the American Conscience,” *Commentary*, 69(2): 29-39.

――――, 2008, *Im Morgenlicht der Erinnerung: Eine Kindheit in Turbulenter Zeit*,

Wien: Molden Verlag.

———, 2011, *Adventures of an Accidental Sociologist: How to Explain the World without Becoming a Bore*, New York: Prometheus Books.（＝ 2015、森下伸也訳『退屈させずに世界を説明する方法――バーガー社会学自伝』新曜社。）

Berger, Peter L. & Richard John Neuhaus, 1970, *Movement and Revolution: On American Radicalism*, New York: Anchor Books.

Gitlin, Todd, 1995, *The Twilight of Common Dreams: Why America Is Wracked by Culture Wars*, New York: Henry Holt & Company.（＝ 2001、疋田三良・向井俊二訳『アメリカの文化戦争――たそがれゆく共通の夢』彩流社。）

Heilman, Samuel, 2023, “Peter L. Berger on Religion as Choice Rather than Fate,” Jonathan B. Imber ed., *The Anthem Companion to Peter Berger*, London: Anthem Press, 153-70.

Imber, Jonathan B. ed., 2023, *The Anthem Companion to Peter Berger*, London: Anthem Press.

Lederer, Emil, [1940]1967, *State of the Mass: The Threat of the Classless Society*, New York: Howard Fertig.（＝ 1961、青井和夫・岩城完之訳『大衆の国家――階級なき社会の脅威』東京創元新社。）

Lehn, Dirk vom, 2014, *Harold Garfinkel: The Creation and Development of Ethnomethodology*, London: Routledge.（＝ 2024、荒野侑甫・秋谷直矩・河村裕樹・松永伸太朗訳『ハロルド・ガーフィンケル――エスノメソドロジーの誕生と社会学のあゆみ』新曜社。）

Martin, Bernice, 2001, “Berger’s Anthropological Theology,” Linda Woodhead, Paul Heels & David Martin eds., *Peter Berger and the Study of Religion*, London; New York: Routledge, 154-88.

Mechling, Jay, 1984, “Peter L. Berger’s Novels of Precarious Vision,” *Sociological Inquiry*, 54(4): 359-81.

Rutkoff, Peter M. & William B. Scott, 1986, *New School: A History of The New School for Social Research*, New York: The Free Press.

Salomon, Albert, 1955, *The Tyranny of Progress: Reflections on the Origin of*

Sociology, New York: The Noonday Press.

Sica, Alan & Stephen Turner eds., 2005, *The Disobedient Generation: Social Theorists in the Sixties*, Chicago: The University of Chicago Press.

Speier, Hans, 1986, *German White-Collar Workers and the Rise of Hitler*, New Haven; London: Yale University Press.

附記

本稿は日本学術振興会科学研究費（23K01748, 24K16500）の助成を受けたものである。また本稿の掲載に際して 2 人の査読者の方から大変有益なコメントを頂いた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

Berger's View of "the United States": Evaluation and Conflict He Had as an Exile

Naoki IKEDA

Peter L. Berger is known as one of the leading figures of American sociology in the 20th century. The purpose of this paper is to examine his view of the United States and to elucidate the criteria by which he evaluated American society. This is a key issue to clarify why Berger, who left behind theoretical writings of the 1960s commonly known by labels such as "phenomenological sociology" or "constructionism," actively published papers on the United States from the 1970s onward from a conservative standpoint.

To this end, this paper will first clarify Berger's personal historical experience as an exile. It will then use his two novels written in the 1960s as a clue to highlight his image of the United States and its vicissitude. Finally, based on this, we will examine his papers on the United States around 1970.

Although Berger initially had an ardent admiration for the United States, especially before coming to the U.S., his enthusiasm gradually cooled as he experienced American society firsthand, and his trust in it began to waver. The reality of racial discrimination and the Vietnam War cast a dark shadow over his view of the United States. At the same time, however, they also made him reconsider the meaning of the United States. His religious belief was also closely involved in his contemplation of this issue. We can see his thought on this issue from his novels. Ultimately, Berger reaffirmed the significance of the United States, including its military power, based on his experience that the United States had accepted and saved him as an exile. This was his final decision on his attitude toward the United States, expressed in his 1970 paper.

Thus, through the above discussion, the ambivalent and complicated relationship between Berger as an exile and the United States will become clear. It will not only be significant as a study of Berger, but will also be a contribution to the investigation into 20th century intellectuals in exile.

Keywords : Peter L. Berger, exile, Civil Rights Movement, Vietnam War, conservatism

©Naoki Ikeda 2025